

とする説が定着した。そして昭和49年、香西精氏の「観阿弥生国論再検」と表氏のその説の全面的支持によって、伊賀説は完全に息の根を止められてしまったのである。

私はここで、じっくり香西氏、そしてこの香西氏の論を支持する表氏に反論したいと思う。

表章「昭和の創作・伊賀観世系譜」で伊賀説否定

梅原猛の挑戦を受けた格好の表章は、自著「昭和の創作・伊賀観世系譜」を出し、その中で、“梅原説は空論にすぎない”そして“伊賀観世系譜は後代作成の偽文書である”と言い切る。



伊賀観世系譜は、明治41年発刊の「申楽談儀」第23条に現れる多くの固有名詞を共有しており、少なくとも明治42年以降の創作である。更には、昭和初期に学会で紹介された「四座役者目録」を利用している等、昭和になって以降の編纂である可能性が極めて高い、と。

— 観阿弥が故郷を奪われたというのは、香西精や私が観阿弥伊賀出身説や伊賀創座説を否定したことを意味しており、それを批判して観阿弥伊賀出身説を蘇生させることが本書（「観阿弥と正成」梅原著）の主眼であることを暗示している。

あからさまな挑発を受けながら何の返答もしないのでは、梅原の意見に表が屈したかのように感じる人が出ないとは限らない。能楽研究者全体への侮辱とも聞こえる発言が含まれているのを放置するのも、仲間内では屈指の古株となった身として無責任のように思われる。何らかの形で「観阿弥と正成」の梅原説が空論に過ぎないことを明らかにしておく方がいいだろうと、考えを改めた。

伊賀観世系譜が後代作成のいわば偽文書であることを明らかにすれば、そんな文書を信用し、最重視し、誇大評価して話を展開している「観阿弥と正成」の内容がいかに空疎であるか、梅原の「画期的芸能論」なるものの実質の脆弱さがおのずと暴露されると考えたからである。

伊賀観世系譜が創作されたのは、のちに本論で論述する事ながら、昭和10年代になってからの可能性が高い。

楠正成が観阿弥と叔父・甥の関係であるとする楠・観世縁戚説や、鹿島守之助氏の生家たる播磨永富家と観世家が縁戚だとの説、が、これまた近年の創作に過ぎないことにも詳しく論究するであろう。

上嶋家文書、文学界に大きな影響

上嶋家文書の観世系図発見は、文学界にも多大な影響を与え、楠正成と観阿弥に縁戚関係があることを前提に、

昭和34年、吉川英治が「私本太平記」を書くと、昭和39年には、杉本苑子が「華の碑文」を発表するなど、その影響は大きく拡がることとなった。

☆ 名張市役所ホームページより ☆

観阿弥は妻の出生地である名張市小波田で初めて猿楽座（後の観世座）を建てました。

観阿弥は田楽や猿楽という歌舞が唯一の娯楽であった時代に生きた猿楽師の一人で、元弘3年（1333）伊賀の国に生まれました。（但し、大和盆地南部を本拠とする山田猿楽の出身との説もあります）

幼名は観世丸、本名は清次といひます。伊賀の人という説ですが、伊賀のどこで生まれたかははっきりしません。

学界でも問題になっている、上野の上島家の文書によれば、観阿弥は伊賀国阿蘇田（現在は名阪国道、上のインターチェンジ付近）の豪族、服部元成という人の三男として生まれ、母は河内国玉櫛庄楠正成の兄姉という事です。父の元成は上嶋家に生まれ、服部家を継いだので、観阿弥の本名は、服部三郎清次になっています。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）

観世系図（「昭和の創作伊賀観世系譜」より転載）

